

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 鄭 昭 民

本論は、従来ほとんど注目されてこなかった雑誌『台湾慣習記事』に詳細な検討を加えることによって、この雑誌がいかに関後の台湾建築史に基本情報のソースとして重要な役割を果たしたかを明らかにしたものである。『台湾慣習記事』は日本が台湾領有を開始した植民地初期に台湾総督府と民間が力を合わせて行った旧慣調査事業の成果のひとつであって、さまざまな情報が満載されている。しかしこの雑誌が後に「台湾建築三書」と並び称されることになる安江正直「台湾建築史」、田中大作「台湾建築の史的研究」・「『台湾建築の史的研究』について」、藤島玄治郎『台湾の建築』の成立に決定的な影響を与えていたことはまったく知られていなかった。本論は台湾の植民地時代の建築史研究の成立過程を具体的史料にもとづいて明らかにした労作である。

本論は研究の背景、目的、方法、研究史などを論じた序章と結論を示した終章に挟まれて個別の論題を扱った 4 つの章が本体部分をなしている。以下、各章の構成をみることにする。

第一章「台湾慣習記事における台湾在来建築文化の調査・研究」では、植民地初期に台湾総督府と民間が協力して立ち上げた旧慣調査のための組織、台湾慣習研究会の成立以前の旧慣調査機関について触れたあと、台湾慣習研究会の成立背景について具体的に明らかにしている。それによると後藤新平は従来の旧慣調査に限界を感じ、今後の民法整備のためにも調査範囲の拡大と深化の必要性を提案することになった。台湾総督府内でも本格的な旧慣調査事業の必要性が認識されることになり、1900 年児玉源太郎総督を会頭とする政財界・専門家などからなる台湾慣習研究会が誕生する。この研究会は植民地政府が総力を挙げて設立運営した組織であり、民間人を含むものの全体としての官製的性格が濃厚であったことが指摘されている。この章では機関誌である『台湾慣習記事』を詳細に検討し、実に多種多様な重要情報がこの機関誌に含まれていること、とくに台湾在来の建築文化にかかわる情報についてその具体像がはじめて明らかにされたことが特筆に値する。

第二章「歴史的な在来建築の調査と保存について」では、機関誌に掲載され

た「台南名所考」、「名勝旧跡」と廟社保存をめぐる一連の議論を取り上げ、当該期の歴史的価値を有する在来建築への認識および保存意識が検討される。当時日本でも史蹟名勝天然紀念物保存法の策定に向けてさまざまな調査や議論が展開していた時期であり、日本と台湾の動向の同期性が指摘されている。

第三章「清国時代城郭の調査・研究について」では、台湾諸城の建築にかんする管理や沿革に関する論考を具体的に検討しつつ、その研究動機と方法がのちの台湾建築史三書へ大きな影響を与えたことを明らかにしている。

第四章「漢民族家屋の研究について」は植民地初期の漢民族の家屋について日本人がいかなる認識を有していたかが論じられ、『台湾慣習記事』が一九〇三年の第 5 回内国勸業博覧会の台湾館の構成に与えた影響、台湾建築史三書へのつながりを明らかにしている。

本論は主として『台湾慣習記事』を基本的な史料として用いつつも、ここに参照された史資料は膨大な数に上り、現時点で入手しうるほぼすべてのソースが本論の考察に動員されている。徹底した史料批判にもとづく行論の進め方は論理的かつ精密であり、ここで導かれた結論、すなわち『台湾慣習記事』の有する情報の多角性と豊富さ、それが後の台湾研究の基盤をなしたという主張は説得力あるかたちで証明されているといつてよい。

また本論では『台湾慣習記事』の中心的役割を果たした人物として伊能嘉矩がクローズアップされている。伊能の存在は先行研究でも知られていたが、本論で明らかにされるような重要性はかならずしも指摘されてこなかった。本論の精緻な史料収集を通して、伊能という人物の台湾旧慣に対する超人的な活動が浮き彫りにされ、またそうした特異な人物を生んだ時代背景が見事に示されることになった。

以上のように、本論は史料の収集、史料批判、分析というもつとも基礎的な歴史研究において高い水準に達した本格的論文であり、そこで明らかにされた諸事実は従来の台湾建築史を大きく書き換える可能性を秘めた重要な事実ばかりである。台湾建築史のみならずわが国の建築史の成立を考えるうえでも注目すべき貢献を果たしたと評価できる。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。

以 上